

「忠実を学ぶ生涯」

私達は祭司エリから始まり、その後を継いだサムエル、またこのサムエルから油を注がれてイスラエルの初代の王となりましたサウルの生涯をこれまでみてまいりました。サウルの失敗を見ることにより、私達は自分自身を省みました。聖書には私達の「模範となるような人間」が多く記されており、また同時に「反面教師となるような人間」も数多く登場します。そして、そこから分かることは模範となる人達が同時に反面教師となるものも持ち合わせているということなのです。

今日はそんな一人であるサウルの跡を継いだイスラエル二代目の王、ダビデの生涯に私達の心を向けたいと思います。私達は先週、神様の御手はサウルから離れたということを見てまいりました。そして、その御手はエッサイの息子、ダビデに向けられます。ダビデの父エッサイはルツの息子、オベデの息子となります。ですからダビデはルツのひ孫になります。ダビデの生涯には色々なことがありましたが、それらを通して彼がどんな人間にかたち造られていったかということを見ていきたいと思います。

ダビデはエッサイの八番目の末っ子であり、詩篇51篇5節にはそのダビデの言葉として『**見よ、わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました**』と書かれていますから、その出生は祝福されるようなものではなかったように思われます。当時、不義のもとで生まれ、次男、三男どころか八番目の末っ子などとなりますと、これはもう箸にも棒にも引っかからない、まさしく誰からも相手にされない生い立ちと境遇にダビデはいたこととなります。祭司サムエルさえも神様に示されてエッサイの家を訪ね、そこでサウルの後の王を見つける際、エッサイの長男の姿を見て「この人こそ神が示されている男だ」と思ったと聖書は記しています（その時にダビデは候補者の数にも入れられずに野で羊の面倒を見ていました）。私達が人を見る目というのは実に不確かなものであり、それゆえに私達の世界には色々なドラマが生まれるのです。

しかし神様が人になさることはコリント書に書かれているとおりです『**それなのに神は、知者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみ前に誇ることはないためである**』（コリント第一の手紙1章27節-29節）。

自分の出生や境遇のことで悩み、自らを卑下している方はいませんか。自分を卑下するか否か、その主導権は私達自身にあります。でも神様は私達の出生や境遇がどんなものであるかということを知りながら私達を祝福してくださるお方です。自分の前に主が備えてくださっている「可能性」というドアがありながら、そのノブに生涯、手をかけることがないというようなことがありませんように。主はエッサイの八番目の子、罪の中でみごもった子であったダビデを引き上げてくださったということ、このことはダビデに限ったことではなく、そのまま私達にも当てはまるということをお覚えましょう。

それまでの日々、ダビデはベツレヘムで羊飼いをしていました。他の箇所を見ます時に分かることは末っ子ゆえに兄たちの「使いぱしり」のようなこともしていたようで、そのまま行けば彼の人生はそのままベツレヘムから出ることなく静かに終わっていたことでしょう。しかし、忘れられるかのようにして野で羊を飼っていたこの彼の年月こそが、実は彼がイスラエルの王となっていく時に不可欠な素地となっていました。どういうことでしょうか、そうです神様はダビデをイスラエルの王とされました。その意味するところは彼が「イスラエルの牧者」となるということであり、ダビデは実際に牧者として野に羊といる年月を過ごすことにより、イスラエルの牧者となるべくその訓練を知らぬ間に受けていたのです。彼が書きました不朽の詩篇23篇はダビデの牧者としての経験がそのバックボーンにあることは明らかであります。こうして彼は神の選びを受け、その時から神の霊が彼に臨みました（サムエル上16章13節：英子さん、この箇所をPPで出してください。慶太君、この御言葉を読むことはありません）

なんと単純で無駄な日々を毎日、過ごしていると思われる方はいませんか。しかし、その日々を無駄と結論づけるには早すぎます。その日々が主の御手の中にあるかぎり、主はそれを私達の将来に不可欠なものに変えてくださるお方です。油は必ず水面に浮きあがります。袋の中の針が隠されることはありません。

ダビデもその頭角をあらわす時がきました。ダビデの大きな転機となった出来事はイスラエルの宿敵ペリシテ人でゴリアテというプロの軍人との一対一の戦いでした。ゴリアテは巨人で、まさしくその姿だけで人を圧倒するような男でした。そのゴリアテが日毎にイスラエルの民の前に現れてはイスラエルを罵ったのです。それに対してイスラエルの民は恐れをなして何もすることができませんでした。遂にその罵りはエスカレートしてイスラエルの神にまでおよび、それを聞いたダビデの心は義憤で燃え、彼はゴリアテの対戦者として自ら名乗りをあげるのです。

目の前に立っているゴリアテは頭からつま先まで武具を身につけた軍人です。対するダビデは戦の経験がない明らかに体格も劣る若者です。その時、ダビデは剣さえ

も帯びずに、ただ5つの石をもって「おまえは剣とやりと投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしはイスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう」（サムエル記上17章45節）。「またこの全会衆も主は救いを施すのに、剣とやりを用いられないことを知るであろう。この戦いは主の戦いであって、主が我々の手にお前達を渡されるからである」（サムエル記上17章47節）と言ってゴリアテの前に立ち、その最初の石を投げますとそれがゴリアテの額にあたり、ゴリアテは倒されたのです。彼は神に信頼し、この主の戦いに勝利したのです。

ここで心に留めておくべきことはダビデがこの戦いは主の戦いであり、主がダビデと戦われるということを明確に知っていたということでした。ですから、彼にはゴリアテが巨大であるということや武具を全身に身に着けているというようなことは気にとめることではなかったのです。さらにゴリアテを倒した石投げは彼が長い間羊飼いとて羊を野の猛獣から守るために修練していた彼の業でありました。そうです、それは先ほどお話ししましたように彼の単調な日々が生み出したもので、それをもってダビデはゴリアテを打ち倒すことが出来たのです。まさしく彼が投じた一つの石には「神の御手」と「ダビデの日々の経験」が込められていたのです。そう、彼は残りの四つの石を使うまでもありませんでした。まさしく主にあって彼は「勝ち得て余りある」勝利をとったのです。

私達の人生にもこのようなジャイアントが立ちはだかることがあります。私達の前にたちはだかる大きな心配（The Giant of Worry）や大きな試み（The Giant of trial）に向き合う時に、それはさながら私達の前に立ちはだかる巨人ゴリアテのようなものです。しかし、私達はそれらのジャイアントに対して主と共に勝利をとることができるのです。

こうしてダビデはイスラエルの民の間で英雄になり、その頃には既に神の御手が離れ、支離滅裂な精神状態に陥っていたサウル王に対して、ダビデに対する民の人気がこのサウルをしのぐようになり、サウルはダビデをねたんで彼の命を狙うようになり、それはエスカレートしていきサウルは執拗にダビデを殺すために追跡するようになります。ダビデはサウルから逃れる日々を送り、ある時は洞窟にいるサウルを仕留めるチャンスを得ますが、彼はサウルの命を取るような思いは自分にはないということを示すために、サウルの上着のすそだけを切り取ります。

しかし、そのことに対して『5 後になって、ダビデはサウルの上着のすそを切ったことに、心の責めを感じた。6 ダビデは従者たちに言った、「主が油を注がれたわが君に、わたしがこの事をするのを主は禁じられる。彼は主が油を注がれた者であるから、彼に敵して、わたしの手をのべるのは良くない」（サムエル上24章5節-6節）と自らしたことを悔います。

覚えていらっしゃるでしょうか、先週お話ししましたようにサウルの失脚の原因は「神を畏れず、人を恐れた」ところにあります。しかしダビデはサウルを恐れず、神を畏れたのです。「人を恐れるとわなに陥る。主に信頼する者は安らかである」と箴言（29章25節）に書かれているとおりです。そうです、私達が人を恐れると私達はあれやこれやと画策をたてます。そして、それが物事を複雑にし、混乱が生じます。そのような時に人を恐れずに主を畏れるということに徹していくと不思議と道は開かれ、その心に平安が与えられるということをダビデは何度も体験したのです。こうしてダビデはどんな境遇にあっても主を畏れることを学びました。主を畏れることこそが神の祝福を受ける道なのです。

ダビデはサウルの在任中に、王となるべくサムエルから油を注がれましたが（サムエル上16章13節）、彼が正式な王となるまでにはさらに10年余りもの間、彼は神様から様々な訓練を受けます。サウルが亡くなれば、すぐにでもイスラエルの王となるべく自分の勢力を拡大すればよいものをと私達は考えがちですが、主はダビデにそのようなショートカットをさせませんでした。ダビデは神が備えたもう「その時」がくるまで待ったのです。そして、その年月を経て、まさしく時が満ちるかのようにして彼はイスラエルの王となったのです（サムエル下5章1節-3節）。

王となるまでの諸々の経験によってダビデが学んだことは神を知り、人間を知ることでした。このどちらもイスラエルの王となるためには必要不可欠な経験でした。そうです、ダビデは神を見あげて歩みながら、いつも人間に向き合いました。私達の訓練はしばしば人によってもたらされるのです。彼は何度も絶体絶命というような状況に陥りました。その原因は人間でした。何せ人間こそ、自分の思い通りにならない存在なのですから。その自分の願いのとおりにいかない日々を過ごしながら、彼は常に全てのことは神の力強い御手の中にあるということを繰り返し学んだのです。ペテロ書に書かれている通りです。

6 だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。7 神はあなたがたをかえりみているので、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい（ペテロ第一の手紙5章6節-7節）。

このような年月を経てダビデはイスラエルの王となり、後33年もの間、エルサレムにてイスラエルを治めます。その年月は安泰なことばかりではなく、その間には我が子アブシャロムの謀反というようなこともありました。彼はわが子から追われるようにして都落ちし、様々な中傷を受けたのです（サムエル記下15章、16章）。私達はこれまで祭司エリと祭司サムエルの息子達が宮でなした悪行について見てまいりましたが、このところにきてダビデも子の問題を抱えていました。しか

もその子が自分の命を狙っているというのですから、これはダビデにとってどんなに大きな痛みだったことでしょうか（心に留めておきたいことは反面教師であったサウルの息子ヨナタンがダビデの慰めとなり親友となったということです。父サウルには根深い問題があったのですが、その息子はダビデの理解者となり自らの命をかけて彼を支えたのです。人がどのように成長するのかということはなかなか私達には予測できないものです）。

ダビデにもその人生には二度の大きな失敗がありました。一つはバテシバの事件です。その時、イスラエルはアンモンとの戦いの最中でした。それは勝ち戦であり、ダビデは自ら戦地に赴くこともなく部下をつかわして全軍を指揮させ、自分は王宮にとどまっていた。そんなある日、安らかな昼寝をむさぼり、夕暮れに床から起き、バルコニーに立ちました。眼下にはまさしく自分の国が見えます。そこはダビデにとって最も安全な場所でした。しかし、一転、そこが最も危険な場となりました。彼はそこから部下の妻、バテシバが水を浴びているのを見、彼女を王宮に呼び、姦淫の罪を犯し、彼女は彼の子を身ごもり、ダビデはその罪を隠すためにダビデに忠誠を尽くしていた彼女の夫、ウリヤを戦争の最前線に送り死なせたのです。まさしく一つの罪を隠すために、罪が上塗りされ、転がるようにして彼は罪の底に落ちました（以上、サムエル記下12章）。しかしダビデは一国の王です。部下たちに白を黒と言わせることができるような立場に彼はいます。しかし、彼はこの自分の罪を神と人の前に認め、徹底的にそれを悔い改めました。

もう一つ、彼には大きな過ちがありました。それは彼が「人口調査」を行ったということです（サムエル下24章）。人口調査の何がいけないのかと思われるかもしれませんが、このことには背景があります。士師記の時代にイスラエルには常備された軍隊はありませんでした。戦が起きると部族ごとに兵は召集されたのです。しかし、これでは他国との戦いに対応できず、サウルは傭兵、すなわち諸外国から兵士を募り雇いました。当初、ダビデもこの傭兵制を用いていたのですが、それでも軍力の安定性に欠き、さらに行く先々の戦場で他国が有する戦車部隊を目の当たりにし、ダビデは徴兵制をしき、国の軍力を安定させようと思いました。そして、その徴兵のためには人口調査が必要となったのです。その時、ダビデは自国の戦力を確認して、それを諸外国に誇示しようとする思いもあったと考えられます。こうしてイスラエルは主に信頼してそれに頼るのではなく、自らの軍力に頼る国へと移行していきます。ダビデはこのことによりその罪の賠償として三日間の疫病を受け、このことにより民の7万人の命が失われたと聖書は記しています。

バテシバの件があからさまに指摘された時、彼は悔い改めました（詩篇32篇、51篇）。人口調査をし、その民の数を数えた後、彼は心に責められ、神の前に非常に愚かなことをしたと悔い改めました（サムエル記下24章10節）。深く考えさ

せられることはこの二回とも彼の政策が順風満帆であり、彼の名が確固たる時に起きたのです。かえって彼がサウルに追われていたような危機の時に彼の信仰は否が追うにも引き上げられていたのです。しかし、自分の治める国の四方が平和で、自らの王位が堅固な時にその失敗は起きたのです。パウロはこのことについてこう書いています。

『12だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。13あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである』(コリント第一の手紙10章12節-13節)

「仁」というドラマがありましたがそのドラマで度々、聴かれる言葉に「神は乗り越えられないような試練は与えない」というのがあります。ダビデは自分以外の人によってもたらされた試練、自分が引き起こした試練、どちらも経験しました。しかし、彼はそれらの試練をとおして、神に対して忠実な王と変えられていきました。ダビデとて人の子、確かに彼も失敗を犯しましたが、彼はそれらから「神に対して忠実であり続ける」ということを学んだのです。

私達はこれまで祭司エリ、その跡を継いだサムエル、イスラエル初代の王、サウル、そして今日はイスラエル二代目の王、ダビデを見てまいりました。最初に申し上げましたようにダビデは私達の模範となるような人であると同時に、その失敗と過ちにより私達に知恵を授けてくれる人です。波乱万丈のその人生を通して彼はいかに神に忠実であることができるかということを知り続けた人です。そして同じように神様は私達に対してもダビデのようにあることを望まれます。これまでも今も、そしてこれからも私達は色々なところを通らされていくことなのでしょう。その中には私達が神様に対する真実を全うすることができたということもあるでしょうし、それに失敗するということもあるでしょう。主は私達をこれらのことを通して一つのところに導こうとされます。そうです、それらを通して私達もダビデのように主に忠実であり続けることを学び続けるのです。お祈りしましょう。